



Filipe Alexandre de Andrade Sá
Moura

Continuação do Ser:
modo de Vida

存在の継続：生き方

サ・モウラ, フィリペ・アレクサンドル・デ・アンドラー

デ 存在の継続: 生き方 / フィリペ・モウラ

ISBN 978-65-7869-175

存在の継続：生き方

ネルソン・ブラス・ペレイ
ラの実話

フィリペ・アレクサンドル・デ・アンドラーデ・サ
・モウラ

生き方

宣言されたもの、それによって運命づけられたもの……生き方、言い換えれば、それは私たちが祖先から受け継いだものすべてであり、成人したら子孫を残すという使命がある。

、私たちが獲得できるすべてのもの、知識、言い換えれば、私たちが築き上げたものを知ったときに求めるすべてのもの。

なぜですか？

なぜなら、私たちが理性の力によって挿入された社会に対処するとき、私たちは常に、社会そのものから紳士として見られるように、受け入れられる存在であるように生きなければならないからである。

なぜですか？

私たちはお互いに奉仕し合う存在、後天的な問題がある。

なぜですか？

社会的存在でありながら、野蛮人のように生きることでもあるからだ。

対等に負けないとき。

しかし、常に疑念があり、常に私たちにつきまとう不信感があり、それによって私たちは教えられ、それによって私たちは教えられ、本当に信頼していると確信する限り、私たちはそこに行き、善を行うので、私たちは自分自身によく奉仕する。

本を読むことができるすべての読者を喜ばせたいのです。私のこの本は、寝る前に聴いたり読んだりしたいトピックに魅了されるようなこの本屋でも手に入るものです。

ような真実の記録を読んだり見たりすることはないだろう。

過ちを犯しながらも、私に取り憑いていたすべての病を治してくれた人の真の経験を持っている人たちのように。

今回のテーマは？

フライング・リポート、おそらくあまりショッキングな話題にはならないだろう。読者にショックを与えたくはないが、リポートは真実であり、合法的な体験した形で語られている。

私は掟の中で生き、信じ、千差万別のことを想像し、動物的本能の真の感覚を感じてきたからだ。

力づくで勝ちたいし、いる。

外では、私たち全員が学んできたその存在が私たちを見つけることができる。その重みは、私たちが一緒に暮らすことに慣れていることから来るもので、私たちができるあらゆる悪にもかかわらず、それは決して悪とは見なされないからだ。

すべての存在には輪廻転生があると思う。

私たちの野心は、簡単だと思っている生き方をすることだが、それは簡単ではなく、法律に抵触したときに難しくなり、良い弁護士に支払うお金がないときには、より高い代償を払うことになる。

なぜですか？

私たちが面白くなれないなら、私たちも面白くなれない。

これは私の物語であり、ポルトガル人の父を持ちながらアフリカで生まれた青年の物語である。

それ以来、楽に生きたいという私の現実の生活が始まった。

なぜですか？

悔い改めを示せば、法は私たちに好意的だと私は信じてきたからだ。

しかし、事実が100%証明された場合、裁判所が管轄する法律は、その犯罪を

おそらく読者を混乱させるであろうさまざまな要因を除けば、本当に起こったことなのだ。

なぜですか？

赦されず、罪を犯すことを味わい、自分がしている悪を実感する機会を得ることの苦しさの本当の感覚を読者に伝えることは難しいだろうから。

私たちが社会から見放され、誰もが好んで見る近所の目になっているとき。

なぜですか？

あなたには探求する目がある、それは個々の能力から来るものだ。私たちは常に人生を進歩させる遺産を持って生まれてくるから、苦い人生経験も教えることができるし、私はまだその代償を払っている！

私はアフリカで生まれ、エルヴィラ、カンディダ、サオという3人の姉妹がいた。素晴らしい物語になったかもしれないのに、たまたま良くない人生の物語になってしまった。

刑務所の看守と呼ばれる人たちに悪意は感じなかったが、私はいつも彼らを敵だと思っていた。

私は人生を歩む中で、いくつかの犯罪を犯してきた。

私はこの言葉をよく使っていたが、それはスラングの一種で、私たちが誰と取引しているのか、あるいはオリエンテッドという言葉を使うこともできる。

探した場所はいつも波止場で、暴力がなかったり、誘惑的で挑発的な暴力がなかったりする場所だった。社会の目には好意的に映らない。生計を立てるために使用できる物質を消費する必要性があると見なされなければ、他人が犯罪で生計を立てられることを受け入れる社会はないからだ。

ひどく悪いように見えるが、実際に存在する。

そのように、私たちは皆、悪癖を持っている。しかし、そのように、私たちはいつも私たちにとって知覚できない何かが気に入らないとき、それを悪いこととして悪く受け取る。しかし、これは、私たち皆が育った素晴らしい洞察力を持っている。それらは、私たちのマイルームであり、一緒に生活することで、私たちはより良く生きたい、他よりも良くなりたいという野心を持つようになる。

でも、その子供たちの中に、ある女の子がいた。その子と出会ってからずっと好きだったんだ。

彼女に会ったその日から、僕はずっと好きだった。彼女は僕と、そして僕の姉妹とたくさん一緒に暮らしていて、僕たちはとても親密な関係だった。一目惚れではなかった。僕は、僕が愛した女性のような女性は決して現れないと信じているし、そう信じている。彼女と初めてキスをしたとき、僕はまるで本物のライオンのような気持ちになった。

妻を持ち、家庭を築くという、すべての男性と平等な生活を送る権利を持つ人だ。

彼女は私の生き方を受け入れてくれたし、この愛は一生に一度しか存在しないにもかかわらず、私は賢さを感じないし自分自身をそのように考えたこともない。しかし、私は彼ら全員と出会い、彼らは何らかの形で統合された。

単純な強盗から始めて、武装強盗もやった。でも、コカインの過剰摂取で墮落してしまった。

私は気が狂いそうになったが、強盗で人を襲ったことはない。反応がなければ、暴力を使う必要はなかったし、法廷ではいつもトーンダウンしなければならなかった。

雨の中を歩けば濡れることは知っている。

彼らが持っていたお金や貴重品を奪いたかったのだ。

ボンティーニャで育った、リスボンはいつも楽しい街だった。歴史の本で読んだように、リスボンは歴史的、文化的価値のある街だと考えていた。

つまり、私はただお金が欲しかっただけなのだ。私は自分がいることを知っていたし、ただ欲しかっただけなのに、それを悪いことだと感じていた。私はただ依存症を満足させ、社会的な環境で、人とうまく付き合い、社会的な環境で、人との関係の中で、普通であることを感じただけなのだ。

私は支配者だと感じていたし、私は頭の上にたてがみを生やしたライオンだと思っていた。

彼女のテリトリーを征服し、彼女の人生を支配する。私はそうやって妻を持つ人生に臨んだ！

まあ...私はこの生き方を、人に危害を加えるという点肯定的にとらえていた。残酷な方法で他人を破滅させ、何も残さないような方法で誰かを傷つけたことはない。

私はその時々状況を利用しただけで、お金のため、コカインを吸うための手っ取り早い解決策のためにやっただけだ。しかし、私はいつも必然的なことを先延ばしにしていた。、人間には生まれつき備わっていないもの、いや、受け継ぐことさえできるものなのだ。

私はこのたとえ話を読み解き、読者に伝えることができるほど専門家ではない。うまくいくこともあれば、悪く取られることもある。

なぜですか？

というのも、先に述べたように、私たちが学んできた、常に悪意を持って行動することではなく、赦され、よく評価されることだからだ！

なぜですか？

なぜなら、私たちはこの基準によって生きているからだ。

良い人生を送れるようになりたいという野心のだ。

この関係は、私が22歳のとき、軍隊にいたときに始まった。そしてその時、私は本当の関係を築き、クリスティーナのような情熱は決して持つことができなかった。

私は激しく生きていて、彼女が離れると気分が悪くなると感じていた。

しかし、それは病的な嫉妬ではなく、健全な嫉妬であり、その嫉妬の中には、誰かを無理やり引き止めるような病的な悪意はなかった。

なぜですか？

僕は一人で、もし彼女を失ったら、僕の生涯の伴侶を失うことになると思っていた。僕はハイ・ストリートに行きたかったのに、彼女はカンボ・ペケーノのディスコに行きたがって、ケンカして別れたんだ。私はケンカをしたけれど、それはティナを愛し始める前のことだった。でも、それは状況的なものだった。でも、私は彼が好きだった。でも、彼は私の生き方を受け入れなかった。彼は私に言わなかったけれど、私が正しい側にいることを知っていながら、私の味方であることも示さなかった。

あまり傷つかなかったけど、彼は私と彼の妹との関係を受け入れなかった。彼が私と一緒に住んでいたのは、そのような背景があったからで、私たちは同じ地域に住んでいたの、私たちはその関係を維持したまま育ったのです。

母親はネラス出身のコンセイサン夫人で、父親は知らないが、ラウールといういい人だった。

彼は妻一人だけで生活することを学び、近所の税理士と公言したこともあった。彼は子供だったが、すでに時間の感覚を持ち、勉強もしていた。

父、母、家、食べるものに不自由したことはなかった。というのも、母の給料は安かったにもかかわらず、母はIIエスクードの家賃を払っていた。

言い換えれば、疎遠は忘却につながるということだ。父を失うということは、父と同じように反応しなければならないということだ。

私は彼を英雄として、戦う男として、謙虚な人々の息子として尊敬していた。私が6なるまで、学校に行くまで一緒に暮らしたのは、彼の祖母エルヴィラ。私は祖母に慣れ、卒業し、父の直接の監督から独立したが、当時はまだ目が開いていなかったが、時間の感覚はあった。

私はその瞬間を意識していた。

最も純粋な物語だ。それはなぜか？

今日では、地位や社会的階層に関係なく、誰もがその認められるようになった。

だからこそ私たちは、証拠がなければ誰も非難されることはないという考え方から出発するのだ。

ですか？

このように法律は管理されており、私たちは誰でも法律にアクセスすることができる。

殺さない、盗まない、レイプしない。

しかし、人類の黎明期までさかのぼれば、そのような出来事は何度でも起こる。

私たちは継続性であり、常に継続するもの、運命づけられているものなのだ。

そしてそれは、私たちが大義のために生きているという絶対的な確信である。

テーマを変えることもできるけど、読者の読書の邪魔になるし、実際に起こったストーリーから目をそらすことにもなりかねないからね。

しかし、これらはこの本全体を通して常に存在するたとえ話であり、経験した状況をより具体的に理解できるようにするためだ。

なぜですか？

しかし、人生において非常に重要なことがひとつある。それは、蒔いた種は刈り取る果実であるということだ。

父はいつも私を見ていて、私を王として見たがっていたが、私は王であり、常に勝つことができない戦士であり、私はとても若い頃から始めた。

簡単なことが簡単ではなく、難しいことだと言ったとき、私はそれを狩りと呼んだ。

彼女の顔を平手打ちした後、私が感じたのは、私は彼女をことだった。

当時、アルナルドは刑期を終えていたので、この人物の物語は、私が刑務所のマイルームを旅するのと符合する。本が進むにつれて、読者は現実の社会的なマイルーム、この場合は刑務所の理解するようになる。

ティナとはすでに別れていた。それでどうしたかということ、運を試したんだ。

ポンティーニャの地下鉄で大工の使用人として働いたこともある。黒人たちは私を恐れていた。私はカーボベルデ出身の黒人たちと働いていたが、彼らは祖国では得られなかったより良い生活を望んでいる善良な人々だった。

自国では得られない、より良い生活をポルトガルに求めているのだ。
ポルトガルは近いから探しやすかった。

カーボベルデ人は不平等と戦わなければならなかったので悪者と呼ばれ、彼らがここポルトガルに到着したときには、海外戦争が起こったため、あまり受け入れられていなかった。

私はすでに過去の経験を把握していた。8ときに両親が離婚するのを見たし、すでに勉強もしていた。そのため、自分にとってあまりうまくいかないことはすでに分かって。

私は幼いながらに、母を助けなければならないと思った。

その後、軍隊にいた頃も一緒に過ごしたが、だんだん離れていった。

当時、彼はフィゲイラ・ダ・フォズの運輸サービス実務学校にいて、私は休暇を彼と過ごした。

父はタフな男で、14歳のときに父親を亡くし、祖母の野望であった。

父は、その別れは愛情に満ちたもので、好きな人からのものだったと言っていた。急な別れだったため、父とは二度と会うことはなかったが、母の手伝いをしながら懸命に育ち、母の家で最も長く暮らした息子だった。

私は祖母と6年間一緒に暮らしましたが、祖母はタフで、どん底から生まれ、懸命に育ち、子供たちを決して空腹にさせませんでした。

当時、彼は鉱夫だった。サイクリストでもあり、その後、軍隊に入り、そこでキャリアを続けた。

彼は普通の男になり、生活の必要性からそこに行き、私たち全員が確保しなければならないもの、つまり自給自足を確保した。

こうなったのは、彼がタフな男で、友人の友人で、子供たちの友人だったが、口数は少なかったが、尊敬に値する誠実な人だったからだ。

彼はいつも私にそれを残したいと思っていた。でも、そうだった、そうだった、別離だった、私は少し離れてしまった。私は、在り方や生き方、乗り越えるべき困難や、子孫を残すことができる将来を保証するための仕事を確保する人生の障害について、より深く付き添い続けることはしなかった。

感覚という心理的な鞭打ちは、私を悪化させるだけだった。なぜなら、善は実践されるべきものであることを私は決して見るができなかったからだ。しかし、私は分離によって悪を受け取っただけだったので、善は実践されるべきものであることしか見るができなかった。

悪が頭をよぎった。

そして、非難という行為に至るまで、すべてがそうだった。どこから始

まったのか？

別居は終わった。

しかし、それは過去からの私の生き方であり、そこで私は失望したときの
心配から解放され、安心した。

私の生き方は消費し、盗むことだった。それでも彼女を探したのはその時
だった。何度も探した。その時、彼女はまた私を受け入れようとしたんだ。
わからない。あなたは私を。あんな思いはもうしたくない。苦しかった。
でも、私はいつも生きなければならなかった。私にはまだ彼女がいる。

だから私はこの情熱を大切にしているんだ。

リンホー、3ヶ月の勾留の後、私は受刑者のためのリンホー刑務所に入った。そこでの私の物語は、勇敢さによって制限される存在の勇敢さ、他人の世界で対処しなければならないことから始まる、ロバを相手にするとき、ロバをどう扱うかを知らなければならない。しかし、あまりに利口すぎると、転落する可能性がある。だから、そこでの生活は、陸よりも相手にしなければならない。それが私の救いであり、私が選んだ方法であり、私を勝たせるものだった。しかし、私のスタートは長く、悩ましいものだった。妻もなく、自由もなく、閉じ込められている自分に気づき、迷い、若かった私は、そこで過ごすことができる数年の間に、そうならなければならないかもしれないすべてのことを考えていた。そこで私は何をしたのか？私は尊敬を得ることから始めた。暴力的な争いに巻き込まれたくないとはいえ、それは簡単なことではなく、暴力的な争いが起こるのは、彼らが日常的に行っているからである。

私はヘロインを始めようと決めた。でも冗談半分で、ほら、ヘロインを吸おうと思っていた。でも気がついたら抜け出せなくなっていて、どうするできなかった。でも覚えた。でもそれは後で話すことにしよう。だから始まりは、快楽から逃避する現実があるにもかかわらず、刑務所での生活を送っていたことだった。ヘロインの消費に身を委ねたのは、それがセックスをするという考えから私を遠ざけるとわかっていたからだ。私は、セックスについて考えさせない化学物質に触まれていた。正当なプラトニックな愛もあったし、素晴らしい愛もあった。でも、それは保証されたものなんだ。でも、ただ試してみるだけではダメなんだ。ただ吸いたいだけではダメ常にリーダーでありたいという側面がある。自分がいることを命令するヒエラルキーの中で他人を見ること。それは苦痛で、耐えがたいことなんだ。誰かをかわいそうだとは思わないことにした。なぜなら、自分もそこにいたからだ。正義の借りを返したただけなんだ。でも、自分の道はとても悪かった、この教訓をもっと早く学んでいれば、私は勝っていただろうし、刑期の途中で釈放されたから負けることもなかっただろう。でも、私のイメージは傷ついてしまった。多くの参考文献があり、刑務所での記録もある。それは終わりの始まりだった。辛い始まりだった。でも、あの麻薬を吸った後悔することはできない。あの麻薬は、誰もが大きな欲求を解放するのに役立った。

私は皆、自分の中に築き上げてきた愛を持っているが、それは後回しにして、今は長い旅について話そうと思う、私たちの幸福は、私たちを見ている人たちを喜ばせないかもしれないし、いくつかの点で私たちを不愉快にさせるかもしれないからだ。第一に、窃盗かもしれないし、第二に、奴隷や労働かもしれないし、第三に、乳母や主婦になることかもしれない。刑務所の中には実にさまざまな人がいて、魂の内部で何が起こっているのか、それぞれが何を好むのか、私たちはいつも知ることができない、刑務所の中では、友情は決して買えない。たとえ刑務所の中でお金を払ったとしても。

それ以来、私は中で善への道を見つけることができなかった。それはなぜか？ 自分自身に嫌悪感を感じたからだ。

他人から見れば、彼女はピラニア以外の何者でもなかった。ピラニアとは、私たちが使っていた俗語で、強気な人、自分が諦めていること大義に身を捧げようとしらない人、常に神へと続く道をたどる人、という意味だ。力は生まれる。希望と信念から生まれる。私はいつもそれを持ち歩いてきた。そこで殺人事件を見てきた。

でも私は気にしなかったし、彼らはくれた。彼らは私に危害を加えようとはしなかった。本当のことを言えば、それがすべての始まりだった。私はとても不安定で、予測不可能だった。学校の校長は私に勉強を続けるよう勧めたが、私は勉強を続けた。でも勉強している誰もが家族のサポートや保証されたサポートがあるわけではなかった。

法的な生き方が保証され、悪いことは悪いと主張できるとき、それは常に存在する。だからこそ、保証された支援と呼ばれるのだ。法の中では、私たちが制度に押され、打ちのめされているときに、悪を与えてくれるたちがいる。お金がないから、お金があればすべてがうまくいく、正義が機能する制度に押し込まれているのだ。

彼らがどんなにあなたを信じていても、役人である以上、それを変えることはできないし、ただ報告するだけで、定めた要件がなければ、苦情があれば調査が開始される。

逮捕された警官の何人かはすでに知っていたし、私は隙立っていた。そのうちの一人、アルフレードとのエピソードがある、リンホー刑務所で私は殺されそうになったが、そのとき私はすでにベテランで、5年間刑務所にいた。そのエピソードは刑務所全体、受刑者たちに悪い影響を与えた。なぜなら、私は受刑者たちの励みであり、受刑者たちは私の姿を見て、刑務所内の継続性を確保する手本となったからだ。

私はその場において、上でカーボベルデ人が私の組合になると言ったが、それは間違っていなかった。実際、彼らはあのエピソードの埋め合わせをしたがっていて、私を殺そうとした。私は首領として招かれたが、誰の組合にも便乗したくなかった。ただ、私が望めば彼は死ぬだろうと悟らせたただけだ。

しかし運命の皮肉なことに、そんなことは起こらなかった。彼らは彼を殴っただけで、殺したりはしなかった。彼は取り戻し、私との友情を深めようとしたが、彼はそのエピソードを決して忘れることはないと心の中でわかっていた。私はただ、彼が謙虚で、囚人たちによってではなく、刑務官や管理者によって私について言われたことに騙されていたから許しただけだ、彼は私を打ち負かすことはできない、死という前もって支払うことになるとわかって私は彼を釈放し、彼が謙虚であることに気づいたとき、彼を尊敬し受け入れることを学んだ。私が彼を必要としなければ、彼は生きていなかっただろうから、

私は警官を憎む普通の囚人たちから批判された、
と嘲笑された。

-ネルソン、この男をどう思う？

他のことはさておき、彼はプロフェッショナルであり、警官であること、多くの知識を持っていること、上層部に知り合いがいること、助けてくれる有力者を知っていることなどから、私は彼を受け入れた、彼は私たちの仲間だった。私が言ったカーボベルデ人とは、ネルソンとカルロスのこと、彼らはまさに私が育った地域に住んでいて、私のくれた、この兄弟の、カルロスはPSPのエージェントに射殺されたんだ。彼は前科があり、とても殴られていた。彼は僕とチェスをしたんだが、彼はチェスの"エキスパート"だった、犯罪がミリ秒単位で潜んでいるような環境では、多くのことが起こり、時にはその渦中に巻き込まれてしまうこともある。

つまり、片手でもう片方の手を洗うのだ。

相互扶助をモットーにしていた。しかし、もしそうするように求められたら、状況に巻き込まれる危険性は常にあった。

リンホーでの8年の後、私がユダヤ人の谷に移されるまで、すべてがとても早く進んだ。法務部に勤めていた女性がいた。彼女は私のことが好きで、私は彼女を許したが、私は許した。彼らが私に罫を仕掛けた日は、まさに私がかつてないほど力をつけていた時だった。私は警官とあまり話したことはなかった。危険だった。私は何でもするつもりだった。

将来を見据えた教育を受け、それに耐えることができたからこそ、悪いことが起ころうとも、それに慣れ、人生とはこういうものだ、死ぬために生きるのだ、自然の摂理に従うだけだ、必要なときに連れて行かれるのだ、と教えられることは、私たちにとって強い要素になる。

しかし、ユダヤ人バレーに赴任したとき、しかしそんなことはすべて過去のことになった。新たなサイクルが始まったのだ。これが私の生き方であり、考え方であり、どんな虐待も許さないということだった。私には私の性格があり、私はほとんど水で煮沸していた。ユダヤ人バレーに到着したとき、私は新たな道を歩むことを決めた。過去の悪夢から解放されたかったのだ。過去の悪夢はあったが、本当に悪夢はなかったのだ。単純な言い方をすれば、巡りくるものは巡りくるということだ。しかしそんなことはない。巡りくるものは巡りくるのだ；自分が本当に支配的な存在で、全銀河の所有者なのだという幻想に自分が騙されるのを放っておけばいいのだ。言い換えれば、すべてが機能不全に陥っており、すべてがそのように仕組まれているのだ。雇用主でありながら従業員をコントロールせず、盗むという冒険をし、それが合法化されていると言えるだから。

もうひとつあった。勝つか死ぬか、逃げ場のオール・オア・ナッシングの瞬間だった。それが私の中にあったモットーであり、監禁されている間に得られなかったものを楽しみ、生きる強さだった。私は仲間に対して無償の暴力は決して使わなかった。暴力に支配された他の仲間たちが行使する悪を見て、涙出そうになったし

ヘロインにしがみつきのながらも、もし刑務所で暮らしたいと思うのなら、殺人を厭わず、尊厳を持って生きようと心に誓った、私は敵のいないところに敵を作り、自分自身を悪く歩ませたくはなかったが、私に危害を加えようとする者もいたし、経営陣は私を嫌っていた、彼らは良心の呵責を感じていた。しかし、あることが私の注意を引き、私を変えさせた。私は先生たちを掘り所にして。先生たちの何人かにプラトニックな愛を感じていた、なぜなら私は彼ら全員を知っていたし、彼らも私を知っていたからだ。だから彼らは私を100%処罰しようとはしなかった。

私は自分の楽しみのために、よくボールをプレーした。実際できるものはすべてプレーした。最も高い切り札をプレーした、スペードのエースだ。何人かの人は、そのカードで不運に見舞われることを悟ることが私に言った。時代は変わり、そのとき私は、人生は刑務所の中ではなく外にあるのだと悟り始めた。しかし、私はそれを内面化しなくてはなかった。しかし、それが私の長所であることは知っていた；3人の兄弟がいて、みんなヘロインを使っていた。ヘロインは彼らにとって、その時々ニーズだった。

しかし、心の奥底では謙虚な人たちであり、善良な心を持っていた。なぜなら、彼らは助けられる必要があったからだ。彼らが送ってきた生活、そして私も送ってきた生活は、奴隷制度と言っても苦しいものだった。

しかし、これらすべては生き方の結果であり、大義を駆り立てるものであり、私はそれについて詩を書いたことさえあるのだから。

彼女への手紙あれ何であれ、彼らはいつも私に詩を求めてきた。しかし、私は自分を見失い、消費された時にこの採用したのだ。私は自分の知っていることを知っているし、誰かに教える気もない。なぜなら、私は過去にそれを実行した経験があったからだ。そのおかげで、私はゴミの中にいて何とか立ち上がった人のヒーローになれた。

すべてはそこに行き着いた。経験した方法、生き方、ドラッグをために手に入れなければならなかった方法、ドラッグを勧められても、与えられても、私はだ、売人たちのポン引きになったとき、私はあだ名で呼ばれるようになった。

しかし、私はスポーツマンシップで知られていたし、トレーニングの練習でも知られていた。

正直なところ、このような生活スタイルに慣れてしまった私にとって、刑務所の後の社会環境に溶け込むのは難しかった。なぜなら、刑務所は私たちが知っている環境であり、日常的な交流がお互いを知ることにつながる非常に狭い空間だからだが、物理的にはそうだった。

しかし、それは恐怖ではなく、単なる安心感であり、どのようにあるべきか、どのように話すべきか、どのようにあるべきかを知ることによって、状況を克服することができる、この場合、盗み、人身売買、言い換えれば、難しい罪、やりにくいこと、慢性的な依存関係がある場合の搾取も含まれる。彼ら自身、逃げ道がないことを知っている。彼らは依存要素に屈し、命令され、服従させられている。愛する人が生計を立てられない状況にあるのを目の当たりにして苦痛を感じている家族から金をゆすり取るために。

ヘロイン中毒の息子は、人間の尊厳という点で失われうるものすべてを、言い換えれば、人生の誰かであるために受けてきた教育の価値観をすべて失い、親が残してくれた社会秩序や倫理的価値観の中で尊重することに慣れている価値観だから、何人それを宣言する、それが常に延命だと教える教育だと思い込んでいる。

聖書には、私たちは子孫を残すために生まれてきたと書かれているが、カインが弟のアベルを殺したが祝福され、赦された彼は道に迷ったとも書かれている。人生において、時に私たちが導かれることが起こる。それは致命的なもので、実際に書かれているのは、私育った経験や法律の形によって書かれたものだからだ。

なぜですか？

理性の力が常に勝ち、人生について下すことのできるすべての判断は、時として正しいものでないこともある。すべては、中傷、面白くないこと、誰もが思うものでないこと、というひとつの要因によって重くのしかかる。

彼らは軽蔑し、辱めたいのだ；経済力がないとき、私たちは常に遊ぶことに制限される。言い換えれば、これはゲームだと思われているからだ、私たちは両親、兄弟、姉妹、祖父母、祖父母と共通の生活を送っている、彼らは、私たちがお互いを知る能力を持っていること、彼らが私たちのものであること、そして彼らが常に私たちの味方であることを知っている、というのも、結局のところ、私たちは皆人間であり、互いに対処し合わなければである。

私たちは皆、道徳的なレッスンを受けている。私たちをととても身近に感じ、何があっても愛する人の元気な姿を見ようと全力を尽くし、決して危害を加えることを望まない人たちが、彼らが守ってきたイメージや彼らが教えられてきたもの、彼らが導かれてきた価値観の前では、時に誤解がなければおそらく解決できるであろう状況をじっくりとことを許さないのは適切なことだ。つまり、すべてがとてもきれいで、メディアもこのように伝える。ファサードのように、きれいな絵を見せようとするのだ。彼らもまた、私たち全員が受け入れている権力によって圧力をかけられている。とても難しいテーマだが、報道されることすべてに関係している。それは存在し、私たちは存在し、私たちは存在し続ける。教育もまた、理性の支配者であると主張する人々に与えられ、時には放送し、不統一を望む。彼らには共通して、維持すべきものがある：幸福、彼らが熱望し、社会のための幸福を望むことができるすべてのものの達人を与えることができる幸福、しかし、彼らは皆、父と母のもとで暮らし、育てられ、熱望する職業で進歩することができる適切な条件を与えられてきた、しかし、彼らはまた失敗する、しかし、彼らは常に忘れ、イメージに支配されている；私がこの言説を維持してきたのは、私の広大さがこの人生において莫大であるからだ、私は多くのことを学び、発展させなければならないものを発展させてきた

刑務所に収監されていたとき、私はその終わりについて考えたことはなかった。いつも、自分がいた施設のスタッフと直接連絡を取りたいと思っていた。それは二国間関係に関連している。二国間関係とは、すべての国を支配する関係であり、商品を保護するための共同体の関心事であり、制定された幸福を提供できるようにするためのものだ。自由について語るのは最も難しいテーマだ。私たちはすべての自由を手放すことができる。世界で最も美しいものであり、人生で得ることのできる最大の喜びであり、自由であることだ。私たちはただ、人生で遭遇するすべての障害を克服する方法を知らなければならない。その障害には実にさまざまなものがある：私たちは皆、醜くても美しくても構わないし、一緒に暮らすことに慣れれば、外見がすべてではない；しかし、それはアポロの側面であり、ニーチェが描写した美の側面であった。

地球の上に存在するすべての存在について語るとき、彼らが誰であろうと、政治家であろうと、裁判官であろうと、市長であろうと、協会の会長であろうと、みんなそうあり得る、テレビの司会者であっても、カリスマ性を持ち、感謝の気持ちを持つことができる。しかし、誰も許すことはできない。"許す"という言葉は、私たちすべてに理由があり、質問されたときには、私たちのすべての行動が社会を支配する法律に賛成し、"法律"という言葉に恥じないものであることを前提にしなければならない。そこで彼らは罰せられない権利を得たであり、定義されるのである。すべてが合致するからであり、虐待は存在し、これまでも存在し、これからも存在するというのがプロローグなのだ。

私たちは皆、超越とは超越以上のものであり、存在することであり、教えることであり、すべてを手に入れることだと知っているから生きている：哲学、生き方、生きる喜び、これが超越の要因の一つを構成している。

もしすべてが本当に成就し、書き記されていたら、それはとても素晴らしいことだっただろう。

なぜですか？

私合法化された民主主義の奴隷であり、囲い込まれ、より厳しいルールに服従させられている状況を利用しているのだ；それは存在の超越と呼ばれるもので、存在の最も残酷な側面への変容であり、私が感じたことだ。私は自分の、怒りは生きるための糧であり、生き抜くための糧であることを学んだ、私たちはこの問題から逃れることはできない。私たちの特性は多様だが、それらはすべて同じもの、神秘化から生じている。誰よりも完璧な存在など存在しない。誰もが生き方を知っている。そのためには、すべての存在に保証された信頼できる支援が必要だ。私たちは協力し合って働く。他の人たちがより良い生活を送れるように、私たちは現金を手にする。失業、大義名分

私はこの物語を“継続”と呼んでいるが、それは今回の延長線上にあるものだ。

両親が離婚した後、私はサン・ミゲルの修道女入学した、私は無邪気だった。法の力が存在することは知っていた。父は軍にいた。私が道に行く勇気があったのは、父が話してくれた、いた男であること、彼は国家のために尽くしていたこと、すでに述べたようにタフな男だったが、他の女性を愛する情熱に身を任せていたこと、善良な男であり、肉体的にも力強く、あったこと、私は彼の遺伝子を受け継いだ恩恵を受けていた。私は彼をヒーローとして持っていた。これが、後に変化することになるすべての学びだった。

なぜですか？

別居した、私は支配できるとわかっていた。ママと一緒にいるうちに、私はした。ママに恋人をつくった。彼は働き者で、郵便局で働いていた。彼は価値のある男だ。そこから始まった。私はママを助ける必要があり、私はその原因の支配者になった。すべてがうまくされていた、後悔、泣いた、でも勝った、これが一番ふさわしい話題だと思う、私は他の誰よりも彼らを受していた、幸い彼らは元気だ、彼らには彼らの人生がある、言い争いがあるのは普通だった、でも彼らはいつも正しかった、私はもっと欲しいという超越に麻痺していた人間だった、何もせずに手に入れたかった、それが簡単だと思っていた。

ボンティーニャの近所で、同世代のトニーニョと一緒に。

そこで働いていた、ソファを張り上げるためのフレーム職人の男がいた。

私はすでに父との関係でこのような経験をしたので、状況を逆転させることを選択した。私には人生を進歩させる能力があると感じていたので、重荷にはならなかったが、あの日、私は自分を貶めることができたかもしれない。父を思いから、しかし自分を守りたいという思いから、手のひら大の石を投げたが、間違っただけで投げた。投げてしまった。

しかし、オーナーもHIVで亡くなり、私はその状況が好きではなかった。彼が病気で苦しんでいるのを目の当たりにしたが、私はいつも彼を尊敬していた。

1996年3月、私は地下鉄アベニードで発見された。地下鉄ではすでに一連の強盗事件が起きており、そこで起きていた犯罪の報告もあった。その時、PSPがやってきて、身分証明書を求められた。それだけで、すでに記録が残っていた、その1週間前、私はベンフィカのスーパーブロックで読者強盗の嫌疑をかけられていた。しかし、私に同行していた少年リカルドは用心深く、経験も浅く、オヴァールから来て街を知らなかったが、道には詳しく、当時は麻薬中毒者だった。

コカインを使っていた私は、安全な松葉杖を持つのがいいと思った。言い換えれば、将来のために自分をしっかり守る、前進するための強さ、結束を持つのがいいと思った。

しかし、ここからがだ。忠誠心を高める主な要因のひとつである、余談が始まる。こうして私は、すでに知っていたこと、知らなければ信用できないということを発見したのだ。しかし、私の経験は膨大で、それは大きなものだった。私は自分に自信があり、自分のやることに長けていた。すでに武装強盗を何度かやっていた。私は誰にも危害を加えず、ただ金を得る道を選んだ。

何のために？

生きるために、私はこの生き方に加わり、1996年3月、より具体的には28日に、届け出があったと思われる逮捕状の通知を受けた。この話題の前置きを付け加えておくと、その1週間前、私はベンフィカのスーパーブロックで逮捕されていた。私は車の中で寝ていた。車の持ち主は中佐で、すでに海外に行っていた男だった。そこで寝るのは慣れていたが、私はまだポンテイーニャに家を持っていた。実はその夜、私はリカルドと一緒にいて、読者を盗み、車の中で寝てしまった。

ベンフィカのスーパー警察署に所属するPSPエージェントに驚かされて起こされたんだ。でも僕はビビらなかったし、リカルドにもビビらないように言ったんだ。彼は最後まで強く、ノーと言わなければならなかった。逆に証拠は何もなかったんだけど、彼は警察が現れるかもしれないと警告してきた。でも僕は彼を安心させたんだ。何もかも大丈夫だと。ウィスキーをたくさん飲んだし、眠りたかったし、家に帰る気もしなかったし、僕はその近くに住んでいたんだ。このようなことが起こった。男が教え、起こりうる瞬間の状況を訓練するときに感じる最悪の疑念だった。その日、私は逃げおせた。彼は何も私のルールをなんとか守った。しかし彼らは納得せず、近所の車の係員を全員集めて、強盗や青いCDプレーヤーを知らないか聞きに行った。しかし私たちは以前にもすでに何度も犯罪を犯しており、それらはすべて強盗と誘拐の一部だった、私たちは地下鉄のアベニーダ駅にある取調室に行った。警察署はリスボンの大都市警察、ボンバル侯爵のところにあり、私たちは取り調べを受けた。私は何も話さなかったし、リカルドの会話も知らなかったが、1週間前にすでに同じ状況に陥った過去があったので、私は彼を信用した。

その日、私たちは警察署を出た。私は何も言うことはなかったし、彼の証言を信じていたから逃げ切れた。当時、私は運転免許を取得していたし、仕事もしていたが、すでに失業手当を受け取っていた。

免許を取得し、コードを習いに行き、合格して、もう運転していたん、マルケス・デ・ボンバル警察署で受けたとき、私は何も話さなかったが、リカルドはすべてを、私は証言を続けた、公判前の段階では司法の取り調べだった、私は彼らに何もことはなかった、重大な要因によって証明されたことは何もなかった。だから私はそのような受け入れることができなかった、それは自分を放棄するようなものだった、おそらく違う態度をとったほうがよかった、真実を話し、協力し、悔い改めたほうがよかった、でも私は自分の知恵で自分を判断した、私は正義を演じたかった、私に判決を下した裁判官は、人生で不幸な経験をした人だった、娘の一人が過剰摂取で死に、他の残された子供たちも麻薬に溺れていた、私は弁護士から警告された、真実を話すか、さもなければ辛い目に遭うか、でも私は自分を信じた。

当時、私は個人的な弁護士を持たなかったし、一度も雇ってもらえなかったから、刑務所に入ってから、有罪判決を受けてから、刑が確定してから雇うしかなかった。

私は岐路に立たされていることを知っていた。証言があり、私はそれを引き受けたくなかった。私の協調性の欠如のために高い代償を払い、すべてが私の大きな非難に帰結した。私は自殺さえ考えた。

私にとっては悲しい一日だった。私は自分に誓った、どんな不利なみせる、と。

私が勝利したとき、私は自分自身を通して自分を守る術を学んだ。刑務所の機能を遂行する管理権力を含め、誰もが私を尊敬した。なぜなら、何かに勝利したいときに対処しなければならない相手は、彼らなのだから。彼らは作品の主人であり、言い換えれば、彼らが支配する領域の主人なのだ、どう思われようが、どうであろうが、皆がどう、忠誠の道を歩む命じられる。しかし、そこには失格である服従がある。彼らがこの地位を保持するとき、彼らは自分がその状況の主人になれると思っているのだ。彼らは生きなければならない最も単純な存在に身を委ねることはない。それは、これから起こることの予言なのだ。

私がリンホーのI.P.に入所したとき、それは大変な入所であった、大変な入所であった、私は怒りと勝利への意志でいっぱいであった、機会があれば逃げ出そうとさえ思った。P、そして彼らが、私が隠遁生活を学ぶための真の柱だった。私は戦い、闘い、成功した。そうでなければ私は忘れ去られてしまう。誰もが私を覚えている。誰もが私を覚えているのが好きなのだ。私は特徴的なイメージだった。私は、愛することを知らない暗く冷たいリーダーになった。そうして私は刑務所内で栄光を勝ち取ったのだ。彼らは、生きる術を知り、勝つために地球の頂点に留まらなければならない者たちの冷たい行為だった。私はすぐに、教育係、助手、看守、所長に、困難な戦いに勝つために力を貸してくれるよう示した。私は何の支援も感じなかった。ただその時々状況を見ていた。支援は野蛮で、起こりえないことが起こった。私は自分の中の悪魔になった。しかし、私はトラブルを探していたわけではなかった。ただ生きて、生き残りたかったのだ。その時々。

イザベルは、私が健全で心地よい尊敬の念を抱いていた学校の校長の名前だった。彼女はいつも私に付き添い、いつも私を助けてくれたが、後に私の怒りを買うようになった。しかし、私はいつも彼女を尊敬していた。それはすべて、海外からやってきたジョアン・G.私の転任後まで、彼は数年間リンホーの管理部門を担当していたが、私は彼と親しくなった、彼は私を誤解していた。おそらく代議士たちのせいだろうが、私はプロのサークルで高く評価されていたし、誰もが私を仲間として尊敬していた。彼が最も支持した大義のひとつは麻薬密売で、彼は麻薬中毒者を助けるのが好きだったが、その代償を要求した。彼は法律を弄び、仮釈放や条件付き釈放、開放的な体制での釈放申請の査定に関しては影響力を持っていた。彼は悪人ではなかった。自分の後を継ぐ者だけが墮落しないのだ。私は困難な道を選んだ。誰も好んで辿ろうとしない道だが、私はそれに従うことを選んだ。自分に最も適した道を歩むことを選んだのだ。

私は運命づけられていた。運命について語るとき、時々あなたは正しい、現実からそう遠くない。私は子供の頃、たくさんの夢を見た。それは夢が悪夢に変わったものだった。砂漠の中の通路はすでに予見していた。私はすでに自分の未来を見ていた。しかし、それはすべて夢の中で私に描かれたものだった、そのような魔女と呼ばれた人たちと一緒にいたこともあった。彼女たちは私の夢を伝えなければならなかったからだ。その頃、私たちはよく水ヘビを狩りに行って狙いを定めたり、スヌーカーをしたりした。時には手強い相手と対戦したが、いつも勝って。父は私にできる最も直接的なサポートをしてくれたし、彼にそれを与え、彼の訓練を助けてくれた。リンホーに入所するのは大変なことだった。最初から看守は私を深く知りたがっていたし、するのは普通のことだったよ。

彼は所長のポストから外されたが、教区評議会の会長になった。しかし、リンホーを去ることになった原因を取り除くことはできなかった。彼は善良な男で、皆の幸福を願い、同時に誰にも危害を加えなかった、私たちは傘をさしていなければならなかった。私たちは腐敗した環境に住んでいたもので、所長は刑務所サービス総局から搾取できる金をもとにした提案を受け入れた。

もし腐敗があったなら、それを利用すべきだ。

当時、私は16年の刑期の半分を終え、秘密を守った罪で8年間服役していたが、それがシステムの一部である以上、そうならざるを得ないのだ、そうしてまた1年が過ぎ、私がリンホーにいたのは3年目だった。

汚職、管理責任者が許可した麻薬の販売、受刑者の信頼が厚く、麻薬販売で生計を立てていた有力な麻薬ディーラー、ルイス・トーレスという名前
で、刑務所に息子までいた。

その役割を果たすはずだった男たちが

彼らはドラッグでの支払いを承認し、それを保管していた。

マニエル・Tの本当の問題が起きたのはその時だった。司法調査が行われ、意図的な送金があった。つまり、イメージを一掃しようということだった。しかし、すべてを一掃することはできなかった。裁判になり、司法調査には被告がいて、さまざまな証言があった。しかし、私は証言しなかった。証言するよう呼ばれることもなかった。私も多くを語るつもりはなかった。ただ自分の資産を守るつもりだった。処理する価値があると思ったし、黙っていれば何か得られるかもしれないと思ったからだ。しかし、大きな代償を払うことになるとは、私は知らなかった。

バルダル警視は刑務所に入らず、アモリム署長は早期退職を余儀なくされ、マヌエル・Tは教区の市長にまで。

経営陣の交代があり、ジョアン・GがE.P.経営陣の次の名前となった。B棟の工事が始まり、半分の棟が閉鎖されたとき、私はカルロスと同じ独房にいた、彼は慢性的な麻薬中毒者で、私は彼に同情した、彼は彼らと問題を抱えていた。私が彼の独房に一緒にいたとき、彼は保護を求めたこともあった。でもおかしいことに、誰も私に話しかけなかったし、彼が支払わなければならない金や借金を要求することもなかった。私は彼をことさえあった。でも、彼は裏切られた。彼は私にヘロインの借金を残した。すでに借金のために彼を殴った男に、ヘロインが私を野性的な存在、完全な支配者に変えたから、私はそれを恐れなかった。それ以来、私は厳しい生活を送らなければならなかった。誰かが苦しむのを見るのは、私の怒りの絶頂だった。彼らは皆、私にくれたからだ。私は何度も手打ちをした。彼らは私を負かすことはできなかった。

私は無料でヘロインを手に入れ、壮大な価値観を持ち、仲間であり、友人であり、大義を守ったので満足だったが、ヘロインを使っても誰も私に反論しないという強い思いがあった。彼らはみんな私を尊敬するようになったし、彼らは犯罪者だったし、私たちがいた環境ではみんな顔見知りだったし、尊敬されていたし、彼ら自身は私を嫌っていた。彼らは私にヘロインを勧めて勉強させた。私が健全な職業に就いて学べる唯一の方法だと彼らが考えたからだ。それは消費のサイクルの継続だったし、私は良かったし、それに慣れていたし、食べたりセックスしたりしたいという欲求を奪ってくれた。セックスや食事の問題に悩まされることなく監禁生活を過ごすには理想的な方法だった。

1998年にヴァレ・デ・ジューデオスに赴任し、大工の講習を受けたが、10カ月で修了できず、リンホウに戻った。

制裁や懲戒処分につながる可能性のある査問を待つ、いわゆるIII体制、ハードな体制だった。

スザーナはママから譲り受けたもので、いつも独房にテレビがあったから驚きだった。でも、テレビには無限の愛があった。誰かが甘やかしてくれるなら、テレビを殺すこともいとわなかった。

私は111に入り、刑務所のアモリム所長、モザンビーク系だがポルトガル人、背は高いが痩せた男、彼は悪人ではなかった、ただ自分の支配下に領土を置きたかった、静かにさせたかった、そうして彼は私に、そんな言い方はやめろ、さもなければ怒らせるぞ、と言った、私はそうだ、怒るかもしれない、そうするだった、その時私は所長の部屋、つまり彼の机を出た、彼はそこで働いていた、看守のバプティスタだ、彼はよく飲んでしたが、正直で、誰も傷つけたくなかった、ボスのようだった、彼はでいたかった、私はこの看守に驚いた、彼は私を襲おうとしたが、成功しなかった、PBXにいた他の看守も混乱を見て、取り囲んだ、彼らはまた私を襲おうとしたが、成功しなかった、それはさらに数分続いた、しかし彼らの主張が私の抵抗だった、その時50代の看守が現れた、フェロという看守だった、彼は私に話しかけた、

彼はやめろ、誰も私を殴るつもりはないと言ったが、私はすでに看守のバ
ティスタと刑務所の責任者アモリムを殴っていた。

正直なところ、私はその男に尊敬の念を抱いた。彼は男であり、上司であ
り、模範を示してくれた。抑圧の力を代表する組織は、誰もが働けるよう
に、誰もがうまく指揮をとらなければならない。私にとっては、彼は私が
出会った中で最も人道的なボスだった。私は理屈どおり罰を受け、その
行為そのものに対して償わなければならなかったが、彼らの尊敬を得るこ
ともできた、私たちはただ生きるために生きている。しかし、信じなけれ
ばならない。私はすでに殺人の話を聞いたことがあったし、*mareações*（マ
レアソン）という犯罪生活で使われる俗語がいくつかあった。

彼は16歳のときに刑務所に入り、ハンガリー人居住区に住んでいた。彼がセキュリティ・パピリオンで服役していたときに私は彼に。

私は彼にタバコをあげたが、何時間も収監されていたため、彼とは会うのを止めた、A棟には、刑務所で働き、平穏を望む受刑者が収容されていた。しかし、消費者もいたし、麻薬の売人もいた、彼の両親は、より良い生活を求めてカーボベルデに戻り、知識として存在する歴史的な結びつきのために、彼らが生きてきたという苦難があった。

しかし社会的不平等があり、彼らはたくさん働かなければならなかった。彼らは良い人たちで、子供を甘やかすのが好きだった、子供たちは成長し始め、親元を離れて多くの時間を過ごす。自立し、自給自足し、良いものを探してしようとするとき、正当な委任状が必要なのだが、それが麻薬に手を出してしまった、しかし、彼は私のところに来て、私はB病棟にいて、スポーツをたくさんしていたのですが、彼は私とすれ違いざまに、トランプ（カーボベルデの典型的なゲームであるビスカ）をやらないかと言いました、その頃、彼はヘロインも使っていた。そのとき、インテンデンテで彼を見たことを思い出したんだ。そこでは闇の取引が行われていて、誰も傷つけない限り、すべてがうまくいく闇市場だった。

大柄で、野性的で、でも身だしなみはきちんとしている。初めて彼を見たときのイメージはそんな感じだった。彼は社会の目にはそう映っている少年で、アウトロー、社会の片隅で生きている男だと気づいた。でも私たちは皆、自分を守るために、自分の健康を大切にするために、自分の健康がれることを望む、彼はA病棟からB病棟に移され、私の隣の独房にいた。同じカーボベルデ人のティキーニョと一緒にだった、ブラボーも独房にいた。彼に会ってから、彼が長い独房にいたことがわかった。彼らにはそれぞれ違う話がある。ティキーニョの話は後でしょう。ティキーニョは移送された夜から同じ日の朝、A病棟に戻ってきた、その夜、私たちは窓越しに話をした。そうすることでお互いに連絡を取ることができた。

危険は私たちを生かし、勝利に導くものであり、私たちに意志の魂、私たち誰もが具現化したいと願う魂、器用さと狡猾さに満ちた強い魂をもたらす。

前夜、私たちは久しぶりに話をした。

窓から物音がしたので、私は尋ねた：

- 誰がいるんだ？

物音がしただ：

- 僕はウーゴ、それにティキーニョだ。

B棟に移されたその日に犯した犯罪に対する彼等なりの制裁だった。日常的事だった。その時、彼は私に、ドアが開いたら、この場合は独房が開いたら、私と一緒にA棟に来说った。でも彼は黙っていると言った。でも私は思った。彼はヒューゴだった。彼はスターで、人だった。彼はヘロイン中毒だった、彼は売人に無銭で麻薬を供給するよう要求した、それは義務だった、彼はそれを要求した、大きな意味で反抗的な少年だった、強盗が起きたのはその時だった、私はドアを開けさせた、私は外に出なかった、でも彼がそうすることは知っていた、彼がA棟でホットネスを持っていることは知っていた、俗語でホットネスとも言う、それは犯罪の専門用語でストリートを歩き回る人々の日常的な出来事として理解できる。

雨に濡れる

それから独房を出て、朝食をとり、それから電車に乗り、学校に行き、授業を受けるといういつもの日課をこなした、午前中、彼らは私に伝えに来た。消費者でもある少年たちはピラニアと呼ばれていた。彼らはもっとまっとうな生き方を求めていたが、中毒がそうさせたため、いつも人を欺いていた。フーゴはティキーニョと一緒にセキュリティ・パビリオンに行ったが、もう一人、ゼ・ボラがやってきた、彼にエミリオの家の近所のトラックスーツのズボンをあげたことがあるんだが、彼はエミリオから金を奪おうとしていた、パイロ・アルトのエミリオはパイロ・アルトで育った。彼は生意気で、私たちは同じ環境で育った。彼は私のものを守ろうとした：ゼ・ボラは頑健で、体重は90キロほどあった。エミリオ

ゼ・ボラは彼を3階から降ろすことを望んでいた。ゼ・ボラがトラックスーツのズボンを脱いで持った後、二人は口論になった；エミリオが勝つことはわかっていたが、結末になるとは思ってもみなかった。ゼ・ボラは彼を3階から突き落とそうとし、彼の足をつかんだ、首をつかんだ瞬間、彼は。彼の前に手すりがあったか、独房の入り口にあったか、とにかく、手すりはあまり安全ではなかった、エミリオは彼の首を掴んで離さなかった。ゼ・ボラが作った強さで、2つの途方もない力を合わせたんだ。自分が正しい時は逃げない、それが僕らの教育だ。彼らは3階から落ちた。被害はもっと大きいとさえ思った。あの状況ではどちらかが死ぬかもしれないとさえ思った。でも幸いにも彼らは助かった。理性の力は常に勝つ。人生とはものだと思う。今は少し話がそれた。

このような状況の中で、私たちは常に人々と出会い、連絡を取り合い、彼らが私たちの状況を話し、議論することを助けてくれる、先ほども言ったように、なぜゼ・ボラのことをいい印象を持っていないのか、その理由を示したかったんだ。ゼ・ボラは腕を骨折したが、エミリオは何の被害もなかった。ゼ・ボラは刑務所の病院で3週間ほど過ごし、腕にプラチナを入れた。それが彼が抱えていた最大の問題だった。私は彼らが逃げおおせたことを素直に喜んだよ。

その日の朝、たぶん11時頃だったと思うが、ゼ・ボラもセキュリティー・パビリオンに行っていた。フーゴと一緒にいたのは知っていたし、何度か見かけたことがあった。

刑務所で最も厳しい制裁を受けた。「マンコ」と呼ばれるもので、隔離され、独房には基本的なものの以外は何も置いてはいけない。タオル、シーツ、読むための本、独房にライターは置いてはいけない。

強盗の最中にヒューゴはデルフィムの腹を2回刺した、列車強盗の罪で服役していたため、彼はれた。当時、この事件は話題となり、トップクラスの強盗事件として知られていた。強盗はシントラ-リスボン駅のすぐ外で行われ、男が死んでいたが、その男が犯したと証明することはできなかった。

彼が殺人の真の首謀者であることを証明することができたが、彼は有罪判決を受け、服役中、麻薬を手に入れるために何度も家宅捜索を受けた。

パティーニャスというついたのは、彼が誰も信用せず、誰に対しても与えず、片手でもう一方の手を洗うことを知っていたからだ。デルフィムはコインブラに、ティキーニョはユダヤの谷に移された；1998年、6月27日だった、私はすでにヒューゴと別れていた、彼は別の独房にいた、こうなったあった、彼を探していた他の仲間はピラニアそのものだった、毎日30〜40グラムほど盗んでタバコを吸い、消費していたからだ、彼らは常に方向性を定めていたから群衆を惹きつけた、これは麻薬中毒の連続と呼ばれている、彼がマンコを去ったのはその時だった、私たちは同じ独房に残ると決めたが、ピラニアたちはいつもその話をしていた。

彼らは私が本物のピラニアだと知っていたから、私は彼らの付け入る隙を奪っていた。

私はその時々状況に合わせてうまくやっていく方法を知っていた。その時々状況で私と一緒に暮らしていた人たちはそうだった。彼らは私の悪口を言い、私の悪口を言った。すべて、その子が手に入れたものを利用できるようにしようという意図からだった。彼らは自分たちのために注目されたかったし、自分たちが元気になるために注目されたかったのだ、私はそんなことは気にしなかった。人生とはそういうものだを知っていたからだ。誰もが利益のために、元気でいることを望み、得られるものに感謝する。しかし、彼らは私がいつも必要としていた存在であり、彼らも私を必要としていた、私たちは団結した。言い換えれば、もし彼らが強盗を望むなら、私たちの助けが必要だが、そのためには彼らも代償を払わなければならない、ヴェール・デ・ジュデオスにはA、B、C、Dの4つの病棟があり、私はDの病棟で、すでにコインブラからヴェール・デ・ジュデオスに移ったデルフィムと一緒にだった。

彼は私の独房にいたがっていた、でも別の問題を恐れていた。彼はすでにリンホーのデルフィムを殺そうとし、彼を2度刺した、彼はすでに刑務所でいろいろなことをやっていた。彼は尊敬されていたし、簡単に復讐する男で、そう知られていた。でも私は彼に忘れろと言った。あの男はお前にしない、誰もしないって。デルフィムとはいいい関係だった。私は何度か彼に、彼らが彼にしたことが気に入らないと言ったんだが、彼はもう忘れたと言った。

リンホーで起きた殺人事件で、ウーゴ・ラスタとカデテが告発されたんだ。私たちはまだ若く、リンホーの出身でしたから、彼らの名前を挙げればきりがないのですがティキーニョ、ジョンソン、彼は本物のサッカー選手で、刑務所にいた、あるいはいたことのあるすべてのチームの代表でした。

私には私の、彼には彼のものがあつた。

私は女性に依存して生きるのは好きではなかったが、彼女と一緒に暮らすほどには好きだった。当時、私はコカインしか使っていなかったのが、彼女がヘロインとコカインを使うのをあまり良く思っていなかったが、私は彼女との関係を続けていた、ラスタとティキーニョがそこにいて、いい時代だった、市場にはたくさんの材料があつた、言い換えれば、たくさんのドラッグがあつた、ヴァレ・デ・ジューデウスは尊敬される刑務所であり、そこでは極刑を宣告された多くの男たちが通過する。

市場に多くの材料が出回つてため、より多くの材料を供給してもらうために誰もが売りたいがり、デルフィムと国際麻薬密売の罪で服役していたピノキオとの間で争いが始まった、

その男はすでにポルトガルの北部から南部までの刑務所での前科があった。ピノキオはデルフィムをボコボコにするためにフーゴに大量の麻薬を支払った。フーゴは調子に乗って更衣室でフーゴに暴力を振るった。

兄殺しの罪で服役していたマルカオという男に追われるようにんだ、毎日タバコを吸う必要があったから、集金を始めたんだ。その集金のひとつに、マルカオが現れたんだ。彼は僕にお金を取らせたくなかったんだ。僕より何年も刑務所にいた彼には権利があると思ったんだろう。私たちは言葉を交わし、彼は身体的な力を見せたが、何も起こらず、私はお金を持って帰った。しかし、それが敵に勝つきっかけとなった。私は、勝ったチームにタバコの量がかかったサッカーの試合もした。

トニ・ガイボタ、ジョルジェ、ゼ・トー、ルイスで構成されていた。私たちはアスリートで、プレーの仕方を知っていたし、相手を見くびってでも勝ちたいと思っていた、僕は負けたくなかったから、金を払わないと言ったんだ。みんなは僕に腹を立てて、タバコの量を要求したんだけど、彼らは黙っていた。その時、マルカオが量が欲しいと言い続けたから、僕はそれを受け入れたんだ。私はそれを続けたが、あの少年は私を挑発し続けた；ある日、僕は大工コースに行こうとしたんだ。だからユダヤ人の谷に行こうとしたんだ。その日、避けられないことが起こった。看守が僕の独房を開けようとしたんだ。僕が独房にいることはめったにないことだった。でもその日、僕はイライラしていたんだ。クスリを十分に吸っていなかったからね。コースに向かう階段を降りようとしたら、マルカオが現れたんだ。彼はイライラしていたから僕にぶつかったんだ。すでに僕を挑発するようなことがあったからね。僕は躊躇しなかった。パンチを放ったら、彼は反応した。でも彼は何もしなかったよ

その日、病棟の責任者がそこにいた。エドゥアルドという名前で、身長2メートルほどで、身体能力が高く、正直な男で、まっすぐな男。

私はコースを進み、常に彼からの誘いを警戒していた。彼が私を挑発するために時間をかけていたことは承知していたからだ。第六感とは不測の事態を察知することであり、遊び方を知ることであり、あり方や敬意を知ることだ。その後、何も起こらなかったが、その後挑発しようとした；彼が学んだこと、彼が示した勇気のすべてを、私はすでに勇気を得ていたし、すでに合格していた。私は彼の話を聞くのが好きで、いくつかの詩を書いた、

狡猾で、強くて、奔放で、他の囚人たちと一緒に暮らしていた刑務所の真
ん中で、なんとか復讐を遂げようとした。仕事をやめ、学位を取得したと
き、私はなりたくなかった闇の獅子になった。リンハウに戻った。そのと
き、すべてが私に有利に運んだ。なぜなら、私はすでにいた家に戻り、支
配していたからだ。それが私の存在の確認であり、その家ですでに持って
いた支配の再生だった。

リスボンの中心部にある刑務所だ。そこには、存在するあらゆる種類のろ
くでなしが収容されている。ある者は偶然犯罪に手を染め、またある者は
良心の呵責から犯罪に手を染めた、善人であること、友人であること、庇
護者であること、調停者であること、すべての状況を理解する人であるこ
と、苦言を呈する人であること。私は仮釈放への道を歩み続けたが、道の
りはまだ長かった。

私は、自分を傷つけるようなことはしないが、自由を得るために働く決心した。私は組織化された経営陣と対峙していたため、すべてが複雑になったが、その経営陣がいれば、私はすべてを勝ち取ることができた。当時、私はこの経営陣の背後にある動機がとても硬直的で、権威主義的な体制であることを受け入れていなかった。マカオから来た男で、元司法監察官、マカオに設立されたマフィア（24キラテスというあだ名）に襲撃された経験もある男だ。

彼は襲撃を受け、逃げ延びたが、護衛は殺された。彼は上へ行き、リンホーの政権に辿り着いた。

血に毒を持つサソリ、私は彼を呼ばなかった、そして呼ばなかったから私は負けた。

それは収容房での最小限の罰から始まった。それは罰であり、厳しくもなく、刑務所の社交的なリズムの中ではごく普通の罰と考えられていた。ジョアンG所長は私の独房にやって来て、私と話し、助けてくれた。この懲罰から最悪の事態が始まった。向精神薬を2錠飲んだのだが、私の窓際にいたのはハンター、チパンガ、ピラニアで、向精神薬を2錠くれたのはハンターだった。向精神薬の効果がまだ残っていた私は、サンパイオが独房の前を通り過ぎるのを見て激怒し、独房を全部壊してマットレスに火をつけ、外に出た。看守が助けに行くと、私は逃げ出し、中庭に行き、棒と石を2つ手に取り、右腕に「復讐、残酷な欲望」と書いた。その日、私は看守や他の誰でも殺す用意ができていた。

しかし、彼らはいつものように巧妙だった。彼らは私と話をしに来た。私が激怒していることを知っていたし、私がそう宣言すれば、私を擁護する全翼がいたからだ。しかし、私は自分ではとどまらなかった。私はことなしに戦う方法を知らなかったからだ。数時間後、私は贖罪を受け入れた。つまり、交渉を終わらせる期間であり、私がやりように、私は懲罰房で20日間、つまりぐったりすることを受け入れた、PSPのアルフレッド・Mに会ったのはその時だった。元グーンのアルフレッドは、悪党で偏狭な男で、マフィアの仕事を始めるために自分の状態を利用してそのような仕事をしていた、経営いかがわしく、マフィアが仕組まれていた。処罰に抵触し、警備員やサービス、スタッフ、経営陣を軽視して罪を犯したり、何らかの処罰を受けたりした黒人は全員、アルフレッド・Mを通して支払うことになっていた。彼は元PSP、元警官で、彼らの多くを知っていた。

アルフレッド・Mが僕のところに来ることは分かっていたんだけど、そのときにミスをしたんだ。私がシャワーを浴びに更衣室に行こうとしたとき、彼らは私を殺そうとした。その時、私は自分の生きる理由が欲しいのだということを彼らに示した。私はすでに近所に住んでいたもので、それはベアリストであることの問題として植え付けられていた。

私は早くに父を亡くし、早くに大人になった。このことは、後に私が歩む人生に影響を及ぼした。なぜなら、それは将来の経験と超越であり、生い立ちの生き方がそれに該当し、それが過酷なものであれば、私たちはより過酷な生い立ちを強いられ、早い段階で、おそらく誰も望んでいないことをもたらすからだ。

マルカオの段階が過ぎ去ったのはその時だった。私がいっと理性を求め始めたのはその時だった。仲間や管理職レベルでの決断が必要だったが、警備員や管理職で構成された監視が邪魔になることは分かっていた。なんとか別の存在を獲得し、邪魔をすることができたが、私と同じような存在に過ぎなかった。時にはチャンスの問題だ。私はルシターノの魂を持つことを求め、求め、そしてこれからも求めるだろう。私はポルトガルの野生種の子孫だ、

遺伝が存在することは明らかだ。なぜ我々は存在するのか、我々は何者なのか、どこに住んでいるのか。このような疑問は、我々が生きていけるかどうかを疑わせるものだ。しかし、我々は勝たなければならないことを知っている。すべてはこのようにプログラムされていたのだ。私は刑務所の道を歩み続けた。その後、マルカオの戦いの後、刑務官と呼ばれる監視サービスを構成するグループが現れた、私は善人を捕まえ、全てを捕まえた。でも正直なところ、彼らもただ生きていたかっただけなんだ。彼らは決して私に危害を加えようとはしなかったし、私はそれを無視したかった。そうだ、私はいつも勝てるわけではないことを早い段階で学ばなかった。私は人を寄せ付けない場所にいた。命に何の価値もない場所だった。私は奉仕すること以外に人間の本当の大切にすることに興味がなかった。

政治的権力、社会的権力、抑圧的権力には、常にひとつのことがある。私は彼らから称賛される英雄になれたかもしれない。私はコースから追放されるまで、ユダヤ人の谷に戻った。

生き残るために何をしなければ

敵が強力だったため、彼が直面することができたもの

彼らはすべてを消費する機械であり、ピラニアと呼ばれていた。言い換えれば、彼らはすべてを生き延びなければならなかった。外交的な部分、人間関係の構築もあった。言い換えれば、教育者がいて、アシスタントがいて、心理学者がいて、医者や弁護士がいる。本当に何も話することがなければ、何の意味もない。私は愛を持っていた、存在の邪魔になるプラトニックな愛、この場合は男、私はすでに人生のすべての楽しみを持っていた、私はまだ私の私の生活の中で私の精神に残っている女性を愛した、それは強烈な情熱だった、存在することができる最も永続的な関係の一つであり、長引く。愛すること、楽しいこと、存在を愛することは、生き残るために自分の喜びで存在を愛する必要性である。

ストーリーは、存在することの最後の状況までまっすぐ続く。誰もがすでに私のことを知っていて、私を試練にかけようと。

である。私たちは皆、使命を託されている。それは持続し、成長し続ける。私はその成長を見守り続けるだろう。敵しとともにある。私は必要な人生を続け、正直で真実な人々をつかまえた。すべてが。私は何でもできる人々をつかまえた。彼らは何でもする決心をしていた。私は彼らのように生きるセンスを持っていたからだ。しかし彼らはもっと賢くなりたかった。私はすべてにおいて彼らを上回った。私は彼らの賢さと私の知恵を組み合わせる方法を知っていた。彼らは狡猾だったが、常に私より上になりたかった。しかし私は彼らの賢さを組み合わせた。私は隠遁生活を続けた。美しいものを見ても、どんなに、逃げ道はひとつしかないとわかっていた。誰にも危害を加えようとは思わなかった。ただ、彼らがくれることを願った。だから私は絶え間ない戦いに身を投じた。彼らはみな強く、みな生き物だったが、私はそんな気にも留めなかったし、これかられる物語の続きにも関係なかった。私は仲間に、彼ら全員に辛くあたった。私は誰も選ばなかった。私はただ刑務所のヒエラルキーを維持したかったし、そうした。私が望めば、誰もが私に従った。だが、私は彼らを生かすこともした。それが私のやり方だった。私が麻薬を吸えば、彼らはうまく歩けるようになった。道が険しいからやめてくれと泣く者もいた、険しい道だった

他に、勝つか死ぬかだった。

かかわらず、私は何とか困難な道を見つけた。刑期の途中で出られることを知っていたし、刑期の終わりにも出られることを知っていた。私はすべてを逆転させた。言い換えれば、私は心配しなかった。私は大丈夫だったからだ。私の指揮下には刑務所があり、私の仲間は皆そこにいた。その時、私は存在感に激怒するようになった。私には味方がいることを知った。私は悪の道を辿った、私は解釈された、私は自分がライオンだと思っていた、だが私はヘロイン中毒だった、消費するのは難しいこと。私は戦闘に入った。比類なき戦闘に、私は裁判官や教育者や助手や看守長に直面した。父は軍におり、母は当時働いていなかったが、カリー・アンド・カブラルで清掃員として働くようになった。私は母が好きだったし、父と一緒に暮らすことを学ばなかった。

というのも、彼は性格が良くなく、言い換えれば気まぐれで、ポルトガル国家で仕事をしている軍人だったからだ。というのも、私たちが生まれたときに与えられる手本は、私たちをこの世に送り出してくれた人の、従うべき手本だからだ。謙虚で平和的で、どう生きるかを知っている存在、タイプだと思われている、歩き、自給自足しなければならない存在、私は本物の野獣になった、二度と同じように刑務所に直面することはなかった、私は生きようとしていたので、あらゆる状況を完璧に殺す存在になった、彼らは私が生活のために殺すことを厭わないことを知っていた、彼らはいつものように本物のタイプを選んだ、あらゆる状況を支配する存在だ、彼らが私を傷つけないなら、私は彼らを傷つけないと自分に誓った。私は怒り狂い、常にすべての動き、あるいは反応に気を配り、相手が誰であろうと、仲間という世界的なレベルにおいて、正義の世界におけるすべての存在を包括するすべてのもののレベルにおいて、指示を出し続けた。このすべてのために、私は支払うのが難しい代償を払った。

私はみんなを知っていた。それはゲームの完成形であり、団結だった。状況に関係なく、一緒に暮らし、人々と日々接している人々の団結だった；寅さんのように、私は許すことを知らなかった、彼らは実際に私を恐れていた、彼らは私に対して尊敬していた、何もすることはなかった、私たちは刑務所について話している、私たちは多くのことについて話している、それは人生の中毒で最も困難な状況を通過する必要が限り、自由、得ることが困難な価値を包含している、消費主義について話すとき、私たちは消費主義的な存在であり、そのため私は無敵の獣となった。私は自らをライオンと呼び、私と同じような獣と、さらに厳しい知識をもって戦った。

ある者は善人の子供であり、またある者は子供であった。このように、私は社会が与えなければならないすべてのものの存在を確認したい、しかし、それが隣人を見ることの素晴らしさであり、親密さなのだ。もし、あなたが善意で来てくれるなら、私はあなたを歓迎する。もし、あなたが悪意で来てくれるなら、私はあなたを悪意で歓迎し、あなたは私の悪意をすべて持っていこう。

犯罪は後を絶たず、その必要性は大きいと知りながら、私は出来事に流され、いわゆる薬物中毒者になってしまった。彼らは皆、私を高く評価し、尊敬し、私にもっと多くを求めた。

私は彼らが私から思うものを見せなかった代償を払った。私はタフで、無礼で、自分の決断に有利になるようにあらゆることをした。私はもっと稼ぐことができたし、すべてのことからもっと利益を得ることさえできた。彼らは私を好きでいてくれたし、夢さえ語ってくれたのに、私は自分が望んだ野獣になった。私が生きていた状況、監禁、孤立のせいだ。私には女性もいたし、すべてがプラトニックないた。

いつも、美しい喜びを得るために、誰かの人生を台無しにすることを避けていた。私はまだ恋をしていた。

彼らは皆、私のことを心から愛し、尊敬してくれていた。うまく生きられなかったのは私の方だった。私は収監されていた。失ったもの、自由を取り戻すために戦わなければならないことはわかっていたしかし、私は常に善良だった。私は誰も虐待しなかった。理由がなければ、誰も殴らなかった。たとえ、私には難しいことだった。人間性そのものが原因だった。私は常に道徳的価値観、各場面の価値観を考慮に入れていた。私も存在だからだ。しかし、彼らは今まで遭遇したことのないような巨大な獣が現れることを知っていた。しかし、それはすべて私がプログラムしたことだった。私がそう望んだからだ。私は彼らを待たせた。彼らが負けることを恐れて。それはすべて便宜的なものだった。立ち上がり、消費し、支配するための便宜的なものだった。私は早くからこのことに気づいていた。刑務所に入る前から、それは困難な時間であり、過ぎ去ることのない日々であり、仕えなければならない年月だった。マンコで遊んでいる猿が、私はゲームの中で死んでいたの。私はその日のトレーニングで、少し練習したいと思い、彼と一緒に練習しようと誘った、

私は弱い人間で、遊び半分で、彼の首を絞めて、彼は意識を失った。でもその瞬間、私はやりたくないような窮屈さを感じて、見せられているような、遊んでいるような、彼を見て、私は立ち上がり、彼は私と一緒に歩いた。大丈夫かと彼に言ったが、矛盾した返事はなかった。でも彼を見たとき、本当に起こったような気がした。彼が意識を失ったからだ。私は、自分がどれほどいかなかったし、それがすでに経験した地獄の始まりだった：

-心配したよ。

私はいつもその場のしのぎの思いやりを彼に示した、彼を傷つけたくなかった、すべての悪を鎮めるために彼に目を向けた、私は訓練から彼を誤解していた、私の方では大げさだった、彼は結局自殺した、すべてはユダヤ人の谷間でいつかという希望のためだった。

私はユダヤ人の谷に住むことを望んでいた。それは単なる気晴らしであり、言い換えれば、それは私が準備していなかった訓練であった。

刑期が6年を超える受刑者は5/6を利用できる。

でも、刑期の真ん中、約2/3と5/6がある。私は5/6で出所した。それはすべて、監禁生活の間に私の伝記に利益をもたらすために考案されたプログラムであった。私にとっては何の人たちであり、上司にとっては職務上の関係でしかなかった。私が評価していた副所長がいた。彼女は挑戦状を叩きつけられた最初の女性で、私は忠誠を誓っていた。しかしその後、私は間違いを犯したと思った。彼女は、10年間の収監生活で初めて不安定な釈放を拒否した人だったのだ。彼女は私を評価せず、薬物検査を受けるよう要求したが、私はあまりに狡猾だったため、それだけで終わるとは気づかず、裁判官に申請した結果、早期釈放が認められた。彼女は私に4日間の臨時休暇を与えてくれたが、その条件は私が支配人の聴取を受けることで、彼らはそれを命じた。彼に4日間の臨時休暇を与え、薬物検査を受けることを条件に延長した。言い換えれば、その手口は、彼らは常に知っていた私も彼を何度も過小評価したが、私は常に彼を尊敬していた。彼は私の尊敬に値するからだ。彼らは

しかし、私は申請したとき、自分に有利になるように行動していた、というのも、私が彼女に助けを求めに行ったのは、激しい口論のであったからだ。彼女が私を助けてくれたおかげで、私は彼女にトラマールという薬を頼んだ。私は薬物検査でオピエートが陽性と判定され、2+2を組み合わせたときだった、それは、受刑者が刑期の中盤2/3を享受する恩恵を受けて自由になるための最高裁判所である。私は刑務官に身体的暴行を加えたが、それは私が望んだからではなく、彼は私の評判が刑務所の環境では素晴らしいものであり、尊敬されていることを探していた。

システムには逆らえなかった。社会的な秩序がなければならないから、システムはそれ自体で優位に立つ、心理的、肉体的レベル、その他考えられることすべてにおいて、私に挑戦しようとする看守もいた；しかし、私は社会的な人間であり、刑務所内で保護された生活をしたことがない。クリスマスの時期で裁判官が2週間留守にするため、私の仮釈放の決定は延期された。

クリスマス休暇だったのだが、彼女に先を越されてしまった。

ほぼ2カ月後、抜け出したかった私は、長い苦悩の時間を過ごした。

何年も、10年も働いていた。しかし、私はそれを克服し、不安定労働市場を去る日までよく持ちこたえ、4日間の不安定労働市場長期休暇を与えられ、それを無事に終えた。しかし、もっと敬意を払い、トラブルに巻き込まれないようにしなければならなかったのも、私にとってはより厳しい対象になりそうだった。しかし、派遣契約が始まって2カ月が頃、入社してすぐに、私の邪魔をしようとする者が現れ、それが起こった。私は喧嘩に巻き込まれ、その少年は少しひどい扱いを受けたが、彼が一個人であり、男のレパトリーを持つ一個人であったのは幸運だった。私たちは独房に閉じ込められ、査問委員会の命令で、これをもって私たちは聴取を受けた。私は謝罪の紙を送り、彼が私を動けなくしないようにした。その必要はなかった。ナイフで私を殴ろうとしたのだから、そんなはずはない、冗談のはずはない、と。その後、彼はなんとか少年の言い分を受け入れ、私に電話をかけてきて、私も同じ、あれは訓練だった、冗談だった、悪い結果になったかもしれない、と話した。彼は私が話した内容もあまりよくは受け止めなかった。言い換えれば、彼は殴られ屋で、すでに何年も勤務していたし、「カスダトロラ」、言い換えれば、すでに何年も刑務所にいる者につけられる名前だが、私や少年には何も起こらなかった。

私は普通の生活を送り、さらに問題を避けるようにさらに4日間の休暇を取ることに成功した。そして2007年3月、もう1日休暇を取れるまであと11日というところでまた同じことが起こった。

しかし、問題は決して一人では起こらない。私はそれを放っておいた。この理由の結果、起こりえない起こった。情報を得るためにある人物を独房に呼んだ。この人物は私の気に入らなかったからだ。情報をくれた人物、ヌーノ・マルーコ、真の戦士、彼もまた私と同じように不安定な状況にあった。私は甥に誓って、何もしない、ただ彼の知りたいだけだと言った。私は何もしないという丸一日主張した。独房が閉まる時間が迫っていた。私はその人物を独房に呼び、なぜ今までしていないことを話すのかと尋ねた。

こんな状況で私に嘘をつくはずがないと思っていた。彼は私がいつも尊敬していた男の一人で真のあったからだ。私が彼に殴りかかったせいで、看守が私の独房に入ってきて、男が床に倒れているのを見た、それでも、私はいた。私は誰にも密告などしたことがなかったし、管理者や上司たちは、私が囚人たちから文句を言われても決して黙っていなかったから、何でもかんでも私にペナルティを課そうと躍起になっていた。私は常にそのように見られていた。このような大義や闘争の形態を推進する者として、私は5日間の罰を与えられた。何も問題がなければ、つまり間に懲戒処分がなければ、出られるチャンスは十分にあった。しかし、今回は2/3の査定の際に本当に無罪を主張しなければならない。私はドクターに無実であること、何もしていないことを告げた、

私はこのことを考慮に入れず、この状況に憤りを感じたが、決定を待ち、決定は私が2/3で出所できる可能性を断ち切り、新たな査定、つまり刑期の5/6の査定のみ恩恵を受けられるようにした。言い換えれば、法律が有利であるため、私は5/6で出所することになる、この場合、私は5/6で出所することになるが、少なくとも6カ月はおとなしくしていなければならないので、5/6になる前に再審査を受けられるよう、裁判官の決定を取り消すための上訴を主張する代わりに、さらに3年近く刑務所で過ごすことになる。私の刑期は3月に言い渡され、同年5月に仮釈放の審問を受けたが、3分の2カットの決定はまだ出て。そのとき、状況が起こった。今度は看守とのことだった。その看守が乱暴で厳しい言い方をしたこと、私とその命令に従わなかったこと、彼の顔を殴ったこと、彼は私と2人きりだったこと、でも別の看守がやってきて、彼はあっという間に同僚と合流し、彼らも一緒になって私を攻撃してきた。私はそれ以上彼を殴らなかった。彼らもまたすぐに私を攻撃しようとするのをやめた。彼らはただ私に医務室の待合室に行くように言った。

というのも、警備員はまだ口から血を流していたので、単純な攻撃から偶発的な状況まで、どのような形であれ、攻撃されたいとし、警備員を攻撃する理由もなかった。

彼らは私を監禁して調査を待たせ、ユダヤの谷の保安課に電話し、入院を命じた。しかし私は、本当に事故だったという論文を進める覚悟はできていた。だから、この論文を進めたいのなら、看守の間に矛盾がなければならぬ、という事実に基づかなければならなかった。暴行を受けたのはレイテ看守ですが、彼は私が実際に暴行を加えたとは書いていません。報告をしたのはもう一人の看守で、彼は保護されている少年を連れて医務室にも行きました。

しかし、検察庁で事情聴取を受けた日、レイテ看守に対する暴行の疑いで私が立件されたことを知った。しかし、その日私に同行していたのはオリベイラ看守だった。この看守と私との話は、中でできた友情だった。私はコンピューター事務の応用コースに通っていて、リナというモニターがいた。私は意図せず彼女に恋をしてしまった。このオリベイラという看守も彼女が好きで、彼は彼女を切った。彼は、私が彼女を好きで、彼女も私を好きだと知っていた。そこで絆が生まれた。彼は私と親しくなり、一緒にするために私の悪口を言ったかもしれない、普通の刑務所から嚴重警備の刑務所に改築された刑務所だった。2007年5月、その刑務所が落成した。その間、私はモンサントに行った。進展するのを待たなければならなかったからだ。テロリストや、より凶悪な犯罪、犯罪組織を収容するために作られた複雑な刑務所で、私たちは常に監視されている。つまり、最初は囚人たちはより過酷な体制で生活しているのだ。

独房から出るときは全員手錠をかけられ、レクリエーションは1日1だった。でも、私は2008年5月にそこに行っただけで、独房に長時間閉じ込められるという体制になった。

しかし、行くためにバンを降りたとき、加害者であるレイテ巡査がオリベ이라巡査を伴っているのが見えた。レイテ巡査の証言を聞き始めたとき、私は素敵なサプライズを想像していたのとはほど遠く、検察庁で尋問を受けたときに私が弁護した論文を聞き、そのとき私はオリベ이라巡査に助けられたと感じた。裁判所も、本当に事故だったとは確信していないと主張したが、やるべきことはやったし、それに反する証拠がなければ誰も断罪されることはない。私は無罪となり、優秀だった。モンサントの嚴重警備刑務所で裁判を待っていた私に査定が下され、釈放までちょうど2カ月だった私はアルコエントレのLPに移送された。

それは、私がすでに刑務所で行っていたいくつかの要求に従ってのことだった。そこはプリズン・コロニーと呼ばれる開放体制の刑務所なんだが、残り2カ月になったとき、彼らは私をそこに、路上に出るよう命じた。

というのも、私はモンサントで1年半を過ごしたが、そこではどんなに多くの仕事をして、非常に閉鎖的な体制だったからだ。

外から食べ物も何も入ってこられないし、面会もガラス張りで物理的な接触が、そこでドラッグを手に入れることは不可能だった。でも、自分に起こった悪いことの中で、ヘロインをやめた得だったといつも自分に言い聞かせていた。

*** 閉鎖

ピンク・フロイド - 私たちと彼ら

“私たちと彼ら

結局のところ、僕たちは普通の男なんだ。

神のみぞ知る

私たちが選ぶことではないんだ。

そして前列は死亡した

将軍は座り、地図の線は左右

に動いた。

黒と青

どれがどれで、誰が誰かわからない。

結局は言葉の戦いになるんだ。

よく聞け、銃を持った男が言ったんだ。

つまり殺すつもりはないから、短く鋭くショックを与えれば、もうやらないだろう。分かるか？ つまり、彼は軽く済んだということだ俺なら、彼を叩きのめしただろう！ たった一発だ。

でも、本当に.....つまり、良いお金がかからないってことだよ」。

ダウン・アンド・アウト

ウィズについては、それがたくさんあるのは仕方がない。

そして、それが戦いのすべてであることを誰が否定するだろうか？

閑話休題 忙しい一日

だ

お茶と一切れのために、いろいろ

考えているんだ。

老人は死んだ

copyright© ピンク・フロイド
